

## 「2025年度香港中文大学サマープログラム派遣参加報告書」

京都大学農学研究科修士課程1年 永谷 道朗

① 今回は海外で3週間も寮生活をした初めての経験ということになる。言葉の通じない異国で何とか暮らせた経験から、自分は海外でも何とかやっていけそうという自信が付いた（香港の経済や交通が発展していて比較的住みやすい街であるからこそ何とかなったのであろうけれども）。私は就活の都合で学生の間は留学に行く機会がないと思われるが、就職してから機会を見つけて留学に行きたいと思うようになった。

② 香港では平日は中国語の授業を受けていた。放課後は大館（イギリス植民地時代の監獄の遺構）や九龍城塞などへの観光に出かけることがあった。週末には香港歴史博物館や黄大仙の道観の他に、マカオや深圳も訪ねた。

このうち特に印象に残ったのは香港歴史博物館と深圳である。香港歴史博物館は、常設展で香港の様々な地域の発展の歴史を紹介していて、これも良かったのだが、特に特別展が興味深かった。特別展は国家安全法成立5周年を記念して、2019年の香港の抗議デモを共産党側の視点から語るものとなっており、日本ではあまり見られない立場の主張に触れる機会となった。

深圳では中国民族文化村を見に行ったのだが、そこへの移動に利用した深圳地下鉄が印象に残った。手荷物検査を求められたことにも驚いたが、駅名表記も興味深いものであった。というのも、深圳地下鉄の駅名は香港地下鉄と同様に中国語と英語が併記されているのだが、（簡体字と繁体字の違いはさておき）駅の英語名に採用される発音が異なっている。すなわち香港では広東語の発音が英語名に用いられるのに対し、深圳では普通話に由来する英語名が用いられるのである。例えば、香港と深圳の境界である羅湖駅の英語名は、香港地下鉄だと Lo Wu であるが、深圳地下鉄では Luohu となる。2つの隣り合う都市における広東語の地位の違いが感じられる事例である。

③ 平日の中国語の授業は9:30から17:00過ぎまで（但し昼休みが12:00~14:30までであった）であった。また、文化体験で中国茶を淹れたり伝統的なハンコを作ったりもした。この他、8月4日には香港を巡るツアーも行われた。なお、8月16日には大仏などへ行くツアーもあったが、私は体調不良のため参加できなかった。中国語の授業はリーディング・リスニング・スピーキング・ライティングのバランスが取れた実践的なものであった。

④ 香港で様々な経験をして見聞を広げることができたと思う。これを就活や今後（恐らく社会に出てからの）留学に活かせればと思う。